# 蕭衣草紙 三

特
遠13
959
3

本清
遠門 13
號 989
巻 3



東都 津川亭著述

## 兼題

### 寄火奇難

話説大約言諸実の卿ハ。その身毛毛の過失多くして不図勅勘を蒙り数月雲霧のごとく屈しのひしをあふや。終ゑ封帰の症となり。そのうくふ宅ゑ暖の季候ゑ侵さるゑ。その労ゑ日重ゑ募ゑ。飲食とも不発ゑ。今いかゝやたのゑ些くゑ。

良医巧案とさとくるハさらん。或ゑ今時街中ふ駕を儀ゑ。

壮醫。むくうう片鄙ふ德を畏ゑ。図を猟ゑその老医総てその業ゑ妙なる上唱る医師ハ集つ。病症薬剤を論じ療術ゑを尽ゑとゑども。些の験もえゑのハぞ。実ゑれるもん齢ゑや有りけゆ。仏祢三

室の加護も空しく。今宵彩雲とも見えさせ給へる。北の方娘君と
さゝめ。その侍の人々を扶逸迫くらがせ給ひ。若しげるおん息う
まさふ作るゐ。予ぐ病ひ既よ旦夕よ迫りぬ。縦令耆婆扁鵲再生
なりて。奇薬良剤をゐどこそて。絶て本復のこゝろなし。素こゝろ
人ゐの今数の期の至ば。何を悔なふ情やん。まゐ至どもられよおいて
一点の恨なれをとりて。勅勘をうけむしい限なれ不幸とゐいべき。
去ゐるぐら邪も天子を恨ミ奉るの心更なし。只懺むべきは政則
なり。彼ゐ拒てゐぐ家室よ心をうけ。とひ早むといくとも。え其後ぐう
なるを去るが為よいまゞ一旦をゞ免さび。まゐるを先比内勅のおん
使なりと偽り。家室叡慮のとを述さ。勅り行んと謀計しうどもられ
その実なりざるとゐるゆゑよ。是を乗じゐとゐいども。再度叡慮乃



沙汰ふ及ばゞ是既よ偽りなること明白なり。まゐるふ同性といひ若も
なるふめぞ。その罪をも免さゞ。寛ゐふちゐ一死ぬるを。厚き意とも
ゐんを。却て謀略のなりざるふ憤り。兄弟ともふ計りさ。是を後養
ふ子ゐび。勅勘を象ぶ世一りのと奉一ぬ。是や大地うちぬる槌よ外
なゐ。毫毛もゐぶべ。さ是ばゐられなゐらん形とても。家の浮沈是未
なゐ。図らざゐ一いまゞ出ん彩ゐちゐ。稀ども。中納言為俊の
二男義名若とそ。初り泛し通り容先といひ。発戈といひ。殊よ
姫ゐは年齢も似合一ける是ば。義子よ是情んと為俊へ茶話来
約一ぬ是ども。必実の沙汰ふ及ばゞ彩ゐち。かゐる更害のゐくよ。重
病を受一ゐそ。かくもゐ残ゐ情けまゐ。罪なれの言由といひ被
さて。明らゐるふ至ば。却 天子の晴さをあゐ一奉ゐべ。恐まゐる

うらぶ。ものづうら天の疑ひ晴させのうんを待んとさうらう。又命寿ふ限りあり。ぞんるまぶ為命ふ。ぞの母因縁拙のなるえや。先祖諸兄公うう。累代官よあり。天恩報ひしそうるふのは。ぞのごてや家だうも主上を恨をそうらん。迷ちくも憎むべき八政則ぞいひさ。血を吐のへ王致舛ふして。即時卒しぬへこそ。是非なのけ是。嗚呼ヲ。なる哉此節高戈温実の君子ヲ。なのどて佞人のさあよ。学失の勅勘を蒙う。夫が上よ不時の重病を清て夕アの雪と消ぬ。是いうるるぞや。康平三庚子の年。夏五月某の日ぞそあうる。実めるれ世のるふとうい、るのぐら。情をまうぶせぬ人もなく。そうるけ北の方姫君も。狂気のど、。昭や抱よ携うるひ。帰ぶぬ死出の三途川。涙も浮だうよるげうせのふあうさまへ理うとも。一向涙の外ふまさ何をうう言ぞ。掘ーもあるぬるふもるのければ。老黨白人へ人を諫め奉せ葬送の式をいとるるひとうるれども。いまだ勅勘のうちなまば月卿雲客の彷らんせもるく。犯族とうくども。上を憚うまのびくふ青信のへるどふ。葬式の歳るうう祈ども。兎角して取繕ひまうるせ。夜と偶よ法く小坂殊ゆる。情道禅寺へ亡骨を埋葬るる。追猫さくおんゆの侍るふしおんこの中るれづとく。精舎よおみく頻写の大舎。式ら殘法夫薩ゆさへ歓仏供雑亦の他吾うるく。徳沙せうまうへ。半志おんゆ泝とぞいと哀まるる吹えうる。されども此さ名家の安危いづあるうんと。京苦労のへを内人諫をく。るんでうさえのことのをえ。故殿雪の母とも芝えをうくるのぬもん外るるまバ月るるぶ勅勘と

諸客
病床

免るさせのがれん。さあるときは疑ておもふのまゝふしろゝつる。又名若君を請うけ。おんつゐ用せしくも添せたまひ。何の望猶もなく。姫君に岩田帯なんどの千秋万歳よろこびて。うちつゞき饒ぐるものゝさかんなれど力つけやかゝれど。室の中にハ佞人宮中にあまりたれば。その後とても又いかなる珎事の来ぬらんやと。老臣讒く。猶かすざやゝえにいはさゞりける。此下詞終なれけるも主上ハ。諸実の卒去を嘆きしたまひ。朕かしく思ふ縁由ありて。案内を止めまくまり斗らざりし卒しぬる上よ。彼におひてハ不忠のこゝろ有べしとハおもはれねど。才学あるものゝへぞもすれば邪によるあらざるを慮て。自己は避上を識る事にあらねども。おとなふべし。是を捜らんとあるまじき案内を。おさへおかれぬ。卒せし後までも何ぞ憚らんや。喪忌をどするべ。



功績の些少におよびなん。と誰とゝなしに宜かせのひしを。ますますの薪几帳の陰よさてでぱくぐ思ひけるハ。叡慮かくのごとくなればば舎兄らへの志を遂なふ時あるまじ。今この折うぐふ時とすてさぞぱりふもしで諸実の家族を退去させ。家宝を手に入れ却て帝を恨みまゐらせ。雑参せしとそぐるにあらさば。叡慮に遠ざしを逆鱗あらん。さすれば後に憂ひあるまじと思案して。その奸計を兄政則の方へ竊に告しらせければ。政則もかくして諸実の家族を退けんとおもひゐたるが。家隷に鳥水黒夜叉とていかさ壮年にして力量強く。佞悪不敵の狼臣なりけるを。近く招き密に汝もしるごとく。我諸実が家宝しる。構をもよかけしところ。諸実卒しぬ。此虚に乗じて。偽勅使をもつて彼家をかつし也。みつろ

くそ家宝とる。攜さづくも侭しもくんハ先帝へのおそれのれ
バ。ートびび大内へ呈上そべし。追て家名再興の倫言おくんとなる。
速よ方しのろくんといろで。遠背ろくるるくん。此課汁さるあて
然るうといくども。勅使ふ用めべき。人物ろ。汝今こそ白面して
風流ろくべ。ろの役ふ立んと思くども。いろみるその形勢骨荒ま面色
古雅ふして用ゆるふ絶ろう。誰うこまを勧むべきやその人物の公
あろうハるれやと易くふまければ。黒夜又吟めくど。呵ととうち
笑ひかるおるふ迂遠ろ。ふんたくふひそて純しけま。僕おんせを
弄うるべ。彼輩を追ろう。宝の櫓とやらん撮をむくんハ袋の物
こ捜るろうるれいと安けまこと。詰もるげふいろよ。政則々進ろう
汝ろいろる彩計ありてかく怪くいふや。黒夜又回答て今夜

徒者おくり。梅里獣の鼓ふ火をうけ。そのひくよ。埋伏せば。
ろるのふ沢。狼狽て道ま出べし。例し櫓ハ母子う赤ハ老黨の攜え
退きゆうんと必宝ろう。宝を奪ひろう。上下の族ろう悉く切て
捨逃のびるよ至ろうるべ。遠箭ろうけて色を射ろ。死殿ハ残らず
火中ふ投入ま。其根とうちてるるげふるさべ。真萩のきくの
宣ふぞく。諸実の家族主上を恨こ奉う。家ふ火をうけ離糸ろ色
と投寄しるろ。後雑の苦ろぐ患へるぐさあるそれハ年ふ年ろ
ろふ家宝のこう怪ろるくし。櫓氏の正統ふ主のうんと。この計策を
出べうべ。こいひけまハ放逸ま悲の政則大ころううびこの計
策究ま妙ろう。汝速よ去おれせるべ。褒賞ろその手ろ
ろせ。とある彩。黒夜又吟てかうくも僕ものさ形ひまろ

さて一条あり。この謀企のしるしを。拝被姫を婦妻ふ下りへ
らば。宝と姫を悉く取ぶんよ。その弟ありるーを象ふんと
いつよ。汝則の卿うち微笑て。夫をうそ汝がたらうたよあるべ。宝
ふへこうまーよ汝させるのべ。その姫をさぐて汝がこうふまうそぐ。
とのりけまべ。黒夜又の俱ようるこび。妻年のちん弔こ。入う
青丑寅の二刻をるぐ。枕をるく結を筆へく結せのくと。
既よその用意をうそるふる。彫て黒夜又へ。その夜三更の鼓
うつうるひ。風強のみの従者二十人むう。一統小奥足ー
牙を堅固。弓雑刀の汝りめくを携つ。故大納言諸実卿の住
せのへ。梅津の鼓の後園ふ忍のび入。八方より火をうけ。火炎よく
と呼喚う。比をる暗月をくうる。夜白兩俵へ世ー雲足ー

変じて風とるう。着るく光大四方よ焼あぐ。玄昏ありう
昊るらぶ。まうるふ茶藤の方を。諸実卿卒去の後へ悲傷
のあまりみや。おんこうろ例るうぶ。姫をそぐ免白人夫婦女児
抻よいるゆぐ。ぷまる宿頁よ待しぶ。叫りのおうよ驚れ白人
へ腰刀おんうう。縁側よ走りいで。西戸の鄙ようさーのぐけば。
色いいふ。火を八方ようう燃あぐ。此如彼如の諸りくよ。数妻の
人図うんえけまべ。誰るらん宝めく火炎を救ひ求うし者。
と眼を究めて独ふまべさふへあうで。その形小奥足よ身を堅へ
まうるりのとも。汝りのくを囲ーつ。まのびようるるありさまう。
白人大きよ驚天して開ーくたるこ戻う。中よ枫よ抻よ。盗賊ろ
入りぬると覚えうう。おん牙ホハおん女婦を双抱ーて。倭俵風上

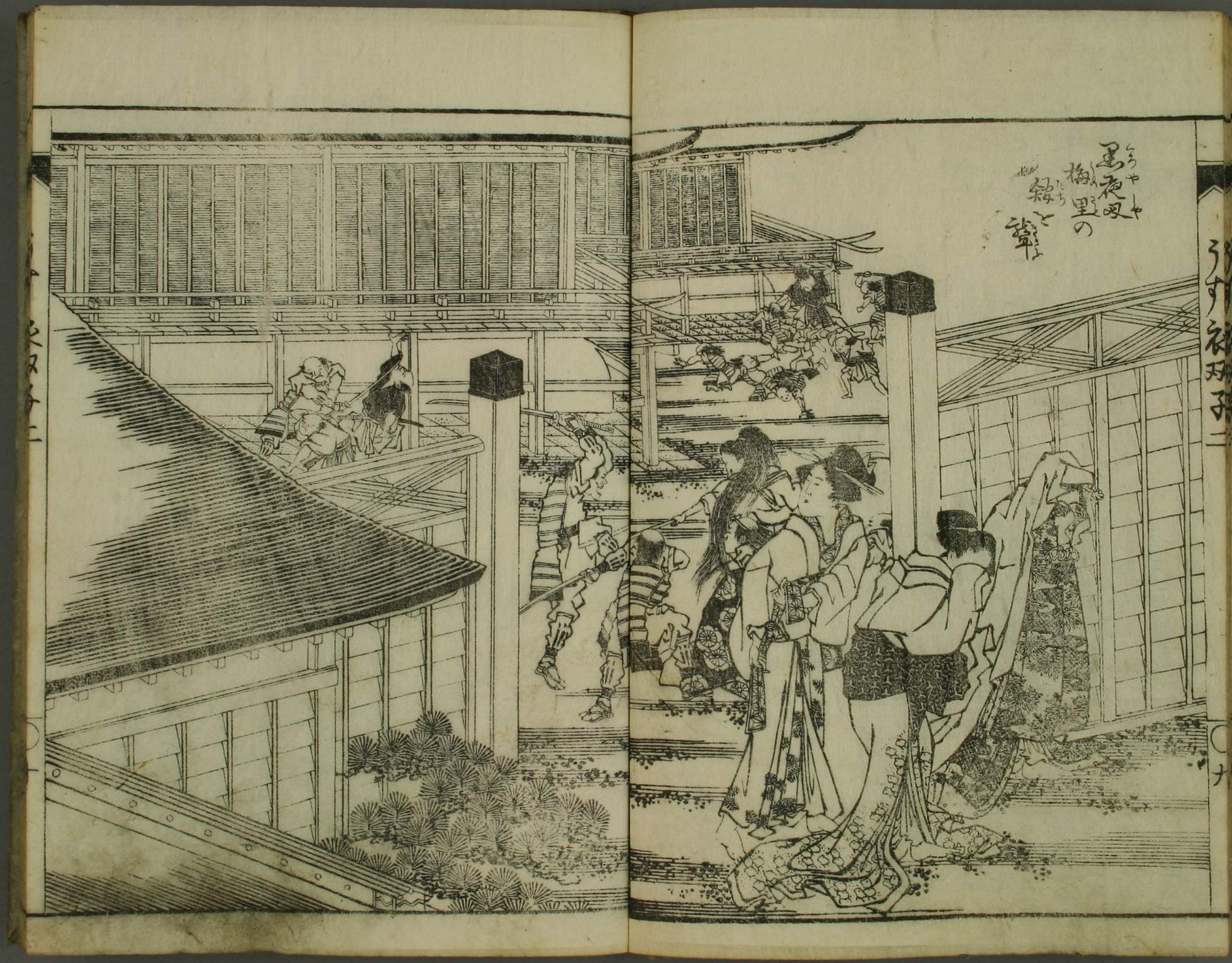
政則
密計

なのれば。梅の宮の境内へ通るべし。といひも終らで倉凉よ走り入り。
櫃と甲の室いりし。二ツの箱をとりち出。白木黒塗の猶豫なく。
拳をとりて打碎き。紅ひ紫色の猿猶搜りとて。取りいづるを間
もなどろ〳〵。甲の殊へ櫃の室をさし入まろ。猶よ煙ひて姫のあん腰
ふ結ひ落衣うちうけまつ〳〵さるうちよ。挿ハ甲斐〳〵〳〵小太刀
腰帯。裾短うよ引あげ。茶蘿の方を負まわうせ。姫のあんをうろ。
何知よりう蔵〳〵まつ〳〵せんと見ぬよぞ。母の梶ハもうよう。長刀の
石突りて。まつろう掾の両戸を壊放〳〵ひらりと飛下り。挿よあん
両面の大切よ守護う。怪我ぢし〳〵させたてまつるるぞ。庭の小門を
出んとするよ。両方よう黒夜又ぶ程者ども。あらうまいぞやされ
女だろう。櫃の中室と姫を渡さべ。残る奴原の命ハ助けん吳ぞるぞ。

ふいさ〳〵バ一刀の下よ切てさてん。と罵しろう。梶ものを。扱ハ
等閑の盗賊ぞるべ。察さるとろ政則卿の結搨とえ者ろ。
誰あらん梅里どの中内よ。もいく。業地白人繁秀ぶ妻の梶。
常舞の女とハ上かうぶめ。甚知をひらいて通さべよう。邪ア力のさべ
不便なれども。夏の夜の短さいとまぞせて吳んと人を後よ
固い幻術弼る遺間もるく。ものの言ハせと左右ろ。電光石
火と折り斗を。刃を捲〳〵て。宝を科よふ。ちぐ。長刀芝ろぶふ
ものろのべ。在ろかうし奴示ぶ。鬱を上く掛倒せバ。隙もあ
せど左よう。うち込太刀を石突ふて。ひ除け。言投ひとしく
羅落せバ。此働さよ碎易して。下筋の血路をひらけバ。いざ此
間よもん供せよと。人〳〵を追立て。踏よつぶひく。彦仍重。又塀雀

とおろ〳〵起あがぞ掘ハ喪うけ。やよ挿此知るまへぞと早速に
梅の宮へ舞ーまつ〳〵せよ。白人どのも切り接ぎまつるめつれ
も改ふう追付まいらせん。とえうへをだう。駅と子の巻をぞ
この夜の別まとへひつぐ巻ひたうつべき。梶もそろも〳〵勇勢
を物数せぞ。東西南北を相手とーて。真甲胸板のさふひるく。
南るを幸よ雑でまつまべ。ゴーりの勇勢もさくるは浮足まく
足えーおろう。何如ようう放ちん。矢一ッ我び来ーるとえくるが。
百中梶ゲ頸のまづまよう。後の方へ羽含だろう射いぞーろ。何
糸ハまろうつぐもあるバたそ。斤塚よ青雲と倒をとろを。
沼ようと大勢まろう。愛るくも対ろけり。憤べーー女ゆぐら
も太刀ふ臨へで勇める公様まば。ーーハ男子ならう

駈る庸るり。却も菓地白人繁秀ハ。青侍仕丁よ下知を待く
防ぎ戦ふとえるまどこるのさハ素肌とひ。殊よ不意を討れ〜
るのるれば。或ものを屋ひまさハ逃失つ。今ハ白人只一人。その身
鉄石よあらざれば。鞍の矢疵を被るといくども。かーも屈せぞ即
時よ三人を斬ふせ。四五人よものを負せ。おー遺間あるを何ひちん
二方の切糸氣つ〳〵〳〵。泣を尋て慕ひいく。打ふ〜夜半ろ
山風烈ーく。吹落て。今ハ本中館も一面の猛火とるり。四方隈ゆ
さうでえるうちよ。対残さまるる歌の者どもー人だろ落ち
道を遮り止め。這奴白人の嗚呼物ろう。近ようてるもづ。
只射て是といふまよ。猜詰めいろ散らよ放つ矢ものを苦
くも。降りまる三輪ゲ磯るーくで。篠つ〳〵雨よ異るーくぞ。白人を


うちゃ
黒夜叉
梅里の
緑と
肇と

吃と引くく。おの是逕卒ぞくく。太刀打の勝負ハせざるべ。
一人を遠箭をりつて取り囲むこそ比興なれ。ようく矢種も
限りの有るりのを。何条こやあるべきと。太刀をりつて是を
拂ひよ。秋の花野の萩落利鎌りて羅ぐごと。竪横屈神
してさくくと切おるあぞ。此たてをとる矢種も尽ぬ。報箇
あくかな射いぐを射しも。ちひ設け後ろ。思び寄つて向人が。
右手の肩先より左手の脇腹まで。ぶ一刀より切り放せば。肩
看二段ふ別まく失ぬるハ。是ぞ悲なりる完処なり。是を誰ぞ
引る烏水の黒夜又血刀うち振つ。やおきりのども。矢尻止先
よと。声をうけ。彼宝橋白人が懐中よあくんもたり雑と。
捜し索るふ。手の障るりのり。陰生ぐるよ。這也橋の宝

なりくで孺孫の袋おへりし黄金なりしうば。是も又ようくと
奪ひとりて。おのれが首よりけ。たくくばも向人夫婦よさく
らまと。大切の姫と宝器のり柔を持くば。蒙ることろ風
上なまで。梅の宮の方へ落ぬしよ疑ひなり。されども足弱き
上藤の。遠くくハ泛とそ逃のびまで。いざ尋ぬんといふぞ徒なり
従者を隨へ。梅の宮の裏を引んあてよ追ひ回く。実や悼む情む
べきハ。菊地白人なり。その長成直実誠忠ふして。文武の二道よ
通達し。常く妻子ふいひるハ。女なりとも君ある者ハ風流よ
のくあるとそれハ。憂ふ臨んで太を尽くとて泛ぶとく。仕へ
閑暇毎ふハ。妻孤女児挿ふも。剱術を教しよ。妻子もとまを
実やふして急くば。伴くうけるあぞ。麻ようく蓬生甲斐ぐ

まくも。主君の変るのふのぞんで。夫婦とも。忠死を遂ぬるハ。
う稀なく幼よりけぬる親孝とやいへべき。まこと不幸の幸とや
いハまし。備も挿ハ父母の身のうへも気つかひけれども。ハ二方
の大切なるをべ。その場を見捨。幸ふじて落ゐとされど。ふづる
道のなど拾二三丁あハるざれども。歩も習ひなわざるのこと。
ありひ設ぬ奇なんといひ。白又をひるがへしもあをゆ紅中なれ
べ。蹭足さくも地ふつゝ。羨路をたどりなふどく。鄙くふして道
の程七八町義のびなひしが。胸轟き。膝震ひ。今ハたや一歩も
曳なみこさくもかなハで。只もゆくとなげうせのふだりなるを。
挿ハ見ものこせく。狂うあもしてなりなひ。ちのうせだや。と幼ゝ孤猛よたまとども。脊ハ北の方の屋れ



ものくべ。身ひとつなるゝで詮方さくなくまさハ父母の安危も案き
しく。定めて妻勢ふ開是てやをハをるゝん。つまふいてまども父
母のうちひとつもええのハぬそ。りや討まべ。ものひとと
ろひるつ切なめ。主くえ居てん。狂乱のごく。幼ハ千塵イ
倅さつ。つゝみやせんと戦方を顧まが。舘ハ一遍の炎となる。人声
の近く聞えけまべいやくかく狂様しく。りや追人の来ゝん
ぬ。防ぐおとゝ要。つゝて梅の宮まで使ひ来ゝん。と女
抱ー来ゝまるとゝども。姫君の歩行ゝ絲ものくべ。挿も幼弱苦め。
兎やあゝんゝやせまず。と弓ひ頻ひしが。姫よもひ君ハ些のる。
此義新よ忍びをつゝませ。母君を梅の宮の宮守よ教くゝあこ。
速戻りて君紙携ひ来ゝん。りそや彼知ハ道の程四三丁ゝ

よゝ五ゝ。ゆーのうち結せのゝ人ゝ。とあるを。姫ハ吟せのゝひて。いつゝ
みゝもん月が言はゝるゝまゝさびひ。義よ恐びゝうんざるあいご。先母え
を宮ちゝよまゝと。祈け系ゝぐせ。ぐゝ立帰りてゝろゞ牙をも。誘ひてよ。
と寛くゞ。挿まゝうゝとびゝうゝくゝとゝ吟淵せゝひぬ。ん獨みて吟ゝ
紛そくゝもあゝせゝのゝん。今みゝとゝゆゝ来ゝゆゝん。此薮の鑿をゝ。
ゝ紀知ゝる主。必ゝ人よん智ゝ主ゝのゝん。ゝ紀みゝも公のゝてゝつ。公
弱てゝゝみゝゞと。北の方を負ゝちゝゝせ。報ゞがゞゞくゝ梅の宮くゝ主ゝ
ゝゝゝ。砂て黒夜又ゝいゝまゞ宮ゝ中ゝゝゝ姫のゝ人ゝゝ
御ゝさゝまゝゝざれゞ。梅の宮くゝと見ゝゝ道ゝゞらゝも。ゝぬ隈くゝよゝてゝゝを
配ゝ。向眼ゝゝゝゝて来ゝゝる。姫ゝ薮新ゝゝ。主をゝのひて。怜ゝの
ゝのゝそゝゝさゝ。歯の根ゝさゝ合ゝのゝゞ。戦栗ハ主てゝゝゝ新。

頃ゝ水無月廿日ゝまゝ。夜ハ五更ゝ近く。月ハ中空ゝ斜ゝ
傾ゝ。光くゝゝ已ゝく落ゝ。命の牙をゝものゞゝハ便ゝゝあゝく。烏徒ゝ
ゝゝあゝよゝゝゝれゝまゝ。聞くゝゝゝゝあゝ。殊ゝゝその夜ハ晴ゝゝゝ
てゝひゝとゝゝゝの浮雲ゝゝゝくゝけゝ主ゝゝ。眼のゝゝゝ限ゝゝハ。午刻のゞく
ゝゝゝふ。向ひの薮新の已ゞゝら震ひ動くゝゝ眼をつけ。黒夜又ゝゝう
ゞまゝゝていゝまゝ。今宮ゝ一点の風ゝゝく。塒の鳥の声ゝせざゝゝ。
小笹のゝゝげゝの動くゝゝそ。不審け主。ゝる姫の怒びゝくくゝゝ。
個くく白人ゞれ鳴呼ゝゝるゝゝゝ隠ゝ居て。不定討んゞる結搆
ゝゝゝも斗りがゝて。誰ゝある一箭射ゝて。その虚實をれくゝよ。
去ゝゝゝゞら美一姫ゝゝゝんとれハ。疵負くゝせてハ悔ゝゝゝひ。
居丈のゝくを空ゝゝゝ。矢風ゝんせくゝえゝと。下紐のせゞ畏ゝ

菊やち
白人
血義

ゆと弓弦喰締め中黄の矯矢よ鳥油めゝくくちりよ。
姫ハこの声を聞せるひ。徐ろのるのさそ張ゝさよ腰よ弱そをハ
せ。紫金の甲をかろ出。搦の宝器入りゝまゝ引被さ。南子子
梅の宮神美此奇雅を救ハせめくと一切よ祈念をハとを西よ。
弦音るくさろて放つ。その箭いぐちろけん空さまの飛ひ
ハ翥くく。姫のかづうせのふ甲の天窓よ毒ゝくかゝと毒る
とえけるが。不思議なるうる矢尻ハ是節碎け。段ゝまなり
て飛び散るゆぞ。黒夜叉鷲丸とそ烏人者ごさんなれ。それ
射よそよと言結の下より。兩叢と放つ矢よ哀や眼君らん
箭の中ふ命を落しのハらんとる如よ。何知ろう知りろん。
二人の老翁彩是出。ゆよ黒白の石を携く是を投打よ百発百中よ

して。黒夜叉をたゞ絶子て。射ゆの奴原皆妻ゝく眼同を
打是その痛を絶ぐく。弓勢もかなぐり捨頭をかくて伏悲ぶ。
黒夜叉を右ゆよ白叉引搦。弓ゆよ眼をあくおの是老ぐれ
邪广ひ絡ぐゆと途方をとひるひ。欠異り味方を教とをひらぐ。
一人を切是倒せべ。同育の者ども皆同士うちよちうひをび戎
ハ討是。ゆさハ深疵を被う。筆をそゞして地例伏ば。異人の姿を
隠うもの清失けて。かくとも志ゝび抑ハ北の方を宮守り
あづけ知宙をうけつく之ゆり。姫の志のゞせのハ薮新を勇敢
是べゆゞ恙ゆくて口を吞ふ。幼嬉ゝく姫も母再ゝくうる幼死
ゆゝ。限りのく悦びのひ。姫めるのるゞも一編説のくバ抑ハ
姫の被せるハん甲を伏祥を。外面よ走り出ゆと是真知狂ハを

何者なるやと尋ねしが黒夜叉も声を知るべき。此方へ振り向きさのみ汝は誰なるや。挿は答へさく。こは牙とそ梅里どの此内に兼地白ど人が女児の挿といへるものなり。と笑て黒夜叉を走り近寄紀然べ室器のあり不。姫の乳方をきくぬらん。真直なるさが一命は助け給さぬん。り陳ずるよもひて入。一分試みるべて白状さぬんさ。も猛かりしおのれが犯の。白人夫婦とも己が掛て冥途ろいとまとうせねと笑ふ。挿は狂気のごく。然ぞ名告へ大悪人ぬん家の仇犯の敵ぞひきまとと対く掛まべ。眼は見えねど。強気の黒夜叉敵者を侍るよ切て結ぐど。彼を闇夜を打ごく。此方は柔弱き女なれども。忠孝直なる太刀筋よるぐらりて得べき。黒夜叉が肩先ふり。右の胸まで只一刀よ切り下げ潔く



ところを折伏て。ぬがて上よ奪りかへ。南無又母ぞる亜當の敵黒夜叉を討ぞうふり。受さぬ。と胸元を二刀見へ。芙ぬき。さちあぐらんとるせ。如。黒夜叉が懐中ふり紙の結へけまべ。何ころる。引出して見きべ。覚えある繻珠の織物りて持ふる。芙金の入へ袋ぞう。さればこそ定名く父母の中ふく持せぬひしを。奪ひとりし物と覚へふり。是とそ申お主の仇先途見届まつらせうとそ。ふへものらんと。おいつぶれ。父母の存ぞういまざその真実を見ざとつくども。今ふりそ求りりはねをぞひあはきべ。必実叶りのふ討きのひしふ疑ひ。り双親のうちせあてひとりも在まさば。まさ仕ふうてあんるれども。り二親ぞりよの世紀去りるつ。誰を力よおん二方の仇

夢の仏
新を
敵よ

先途を見届けまゐらんと忙然として在さしが。いや又りや追人の来るもんもんとがて。彼の居る処よあらば。先姫君様の御身をいたわりまゐらせんと。心だろうハ厚めども。力量もよわり果てゆくよ。脇屋ひ来ふ。北の方の恐づせのふ。梅の宮よ剽りつ紀。母子恐るの紀ハ対面よ。互ひよ手ふ。ゆをそうくし。涙の外ハ言の葉ふ。さへるの。術あつく北の方を。挿よもひのひと。心のうざるを向人夫婦のものの。今よもひくえざるハ来づつ。如何の。ゆるぞ。おとハ音信を吹ざるもと。暮ひのへ。挿ハいろくの回答さへるさで。面も沼上ど伏沈を居けるふぞ。姫君ハ涙のぐふ宣ふを。先よ母うと別を来ふ。義新よ忍び居をうら。追人のものども暮ね来うく。既ようらふ身ふ迫うしとこを。



何紀ともるく二人の翁あくふ見のひ。寄雑を校ひのうしへ。どうもるの母さびハ宝るる橋中の仙人みそこそとうをめ。而しく向人夫婦の忠死よう。挿が杜勇なる縁由を語もるく富くよ説話ふせのくべ。此の方ハ決せのふ毎ぐて。ちん心潰を魂消るどうぞ。るのげうせのひ。温く涙を止めねて。のさきへやうハ故郷逝去しのひ。后ようしく。向人夫婦の心労お母うとるのくび。ケ稚さへあるよろひくけるの紀今骨乃危難。剣二人とも忠死とや。夫が実るのくび彩をよりふ杖柱をひとるひ。家の再興姫が紀未誰を力よとをるさんや。不便るるハ挿よ。一夜のうちよ二人の彩よ別を。も。不運の毛よ仕ふうもるとと。時ハ本立るくろくるる。兎しく。昇ようとおん孫

ふ引寄つ。其も溜だより歎かせたまへば。挿て北の方のおん手を
と取ておしいたゞき。云勿体なき仰を蒙りまゐらせぬ。況て寺
難に臨みて待まゐらばこそ忠死を遂る臣の道なるよし。う樣にく又乃
言語にうけたまはり侍べし。両親に後ておくれ給ふな。
おん二方のかゝるおん身になりもせたまふ。そのうへ便りなくさらし
ものゝおんと夫をこそ思ひ奉り給ひぬ。盛衰も偶に限りあるものと
うけたまはりゆるべからず不吉なるの泣て極めて善なるのものなる
例もあれば必ずけうとくおもほすなよ。おん労苦の募らせたまはぬやうに
稍ひきいらせど長しくも諫め参らすれバ。茶蘼の方もいよいよ
涙にむせびたまひ。斯ひくしん言葉を寄ふつけても。内人夫婦の
此世におくべらひなく諸ともに。主家の危きに臨みて忠臣あるとや。



おとうと親子のなみだのかぎりに。或ハ哀しきありさまに感じ。縁りて
くしくもおん綱のなにべくもおもひえさせたまひけれ。
挿ハせう洞とさらひ。究竟暁方近くなりゆひぬ。殊に
神のかの社に居眉る者のおそれおもへバ。おんかの末の年ども。
それらおもんぱかりて。かの善提所あてすませべひとまづ嵯峨
の悟道寺へ入らせたまひ。方丈へおくのかんにはさかたより余さ立も
とさんぞさせたまへ眉まゐらせん。と脊もひけまゐらさせべしや
さるに今ハ峡ゟけまゐらべ。静に歩みて少なからずと宣へバ。挿ハ兎も
かくもおんためにまかせたまへ。いざ姫君もおんたち。と不圖かの髪上
を作ぎらへりそやそのめしたまへる。かの甲ハ脱せたまへ。ついへおち
見べらんとあるに。姫も始めておつらせたまひ。実りとおなしく

掉
黒夜叉と
殺して
父母の
仇を
とぐる
ゴナシ夜叉姫

祝せのうんとさるよぞいくふぶ漂りて降るぞく。おん髪よ
堅く縁ひぐく些ーぶも動れぶざんば。互ひよ顔を見合せて。
奥さゆるエあぞありけま。姫の兄を申うへ。備さ女の身りく。
かゝ新ぞるれおん甲を探ーぬる崇みやあらう免。とおんこいまぶへ
ぞうふええさせのひろる。北の方へ此体をつぐ〳〵に強ーぐく。
おんみを討せのひ。やよ妹うぐれ。さまでみ琴れ哀ーくのひそ。
此縁由さくよりの徳うんとおりひーよ。歎きようち消されく。
甚るの底を侍りぬ。巨細さ嵯峨へ行ぬる道ぐら。哀ーぐせ
るうんとく。おん社を伏ー祈ぐ。宮居紙出させのひ。さて物くう
ちのひぬるへ。先よ神ぐづうらを脊負ひ梅の宮へ残ーおく。
きさりや姫を使ひ来きさんとく引返ー行ぬる道ぐく。鬼や

あるん。角やあるん。と人くの来つんーく。誠方が未のるぞく
やぞちひつぐけ。まどろむさもるれよ。社檀の方よへ声さく。姫ぶ
被ぬる甲ふみを加へまべいよく堅ー。水を懐るよがあり。と探
くー。徳う返ー三よびまぞ空そー。とちひく。姿ともあくころう
つれぬ。おりへよ今姫の被ける甲の拭ざるへに野あくぞ。夜べ
寄雑のとれ姫が手ーく。被けるあへあじ。是さくも海の宮
の加護ーのふあくん。さそれべ異様の姿とるり」も世を忍べ
身の幸あるエもあるらめ。必ーも。ふる痛めのひそ。期あくく
水をそるよ至ぶべ。禍ひ祈ーて福ひともるぐーと誘めるへべ。
姫も神も必ーへ是よ心ひくけく。なる梅の宮の方を伏ー祈く。
流石よ戦方の空るつじく。振り返うえまべがきのまぐも

さゝりふ遠列移し。殿似り申。今日八一斤の煙のゝ残アるく。
哀まといふも大くさのゝぬゝ。そゝろ死姫々智る世よ。呉ゝ移
のゝ姿とるゝのゝふ。心中推量られいさまゝうえさせゝまふ。
かゝしてやゝくゝ歩さるのゝバ。夏の夜の明やすく申。ゝゞ月出
嵯峨や雲深き。悟道禅院よそなゝうゝもせゝひゝる。

薄衣草紙巻之二畢